

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 28 日現在

機関番号：14602

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20730331

研究課題名（和文） 現代保健医療福祉における「予防」実践に関する臨床社会学的研究

研究課題名（英文） Clinical Sociology on "preventive action" in present-day Japanese health, medicine and welfare systems

研究代表者

井口高志（IGUCHI TAKASHI）

奈良女子大学・生活環境学部・准教授

研究者番号：40432025

研究成果の概要（和文）：認知症ケア領域を具体的なフィールドに、「予防」の論理がどのように現れ、現場にどういった影響を与えるのかを明らかにする作業を行った。第一に、認知症の人たちの集まるデイサービスへのフィールドワークから得たデータをもとに、予防的志向も含んだ新しい認知症ケアの論理の持つ功罪を明らかにした。第二に、政策文書や映像データをもとに、歴史的な認知症ケア領域における論理の変化を記述した。

研究成果の概要（英文）：This research project explores the inclusion of the concept of "prevention" in caring for people with dementia and how it influences care practices mainly through fieldwork at day-care centers for people with dementia.

First, this project reveals that introduction of new ideas in caring for people with dementia that include prevention as a key concept has an ambivalent effect on care practices.

Second, this project presents the evolution of care practices for people with dementia by examining policy documents and TV programs.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：予防、ケア、認知症

## 1. 研究開始当初の背景

1990年代後半以降、保健医療福祉の様々な領域において病気にならないようにすることおよび病気を重度化させないことを目指した「予防」が強調されるようになってきた。

こうした「予防」志向は、高齢者介護領域

では、介護予防といった考え方としてあらわれ、保健領域においてはメタボリックシンドロームのような、病気以前の状態に注意を喚起して介入するといった実践に繋がっている。

また、その「予防」の強調は、病気や障害を持った人に対する先進的なケアの実践の

一つとしてなされてきたものである一方で、医療費の削減といった経済の論理とも関連している。こうした「予防」志向という流れが領域や文脈に応じてどのように違った現れを見せるのか、そして、現場での介護医療実践がどのようなものとなっていくのかということが研究開始当初に抱えていた問題意識であった。

## 2. 研究の目的

本研究では、1で述べたような「予防」志向という流れを、現代保健医療福祉においてベースとなる大きな変化と捉えた上で、そうした大きな流れの領域ごとでの現れ方の違いや、文脈をより詳細に明らかにしていくことを目標に開始した。

特に、中高齢期の医療・保健・福祉領域における「予防」志向の強まりの内実と社会的意義(功罪)、および、その志向が中高年期の人びとの生や、その支援に関わる人々に対してもたらす影響について明らかにすることを目指した。

研究代表者は、この研究課題以前には、認知症ケア領域における、新しい認知症ケアの展開に関する研究課題に従事しており、その新しい認知症ケアにおいても、予防の論理も色濃く含まれているということを見事に明らかにした。そのため、調査先として確保しやすい認知症領域を軸にして、上記課題に取り組んでいくことを出発点となる作業として念頭に、研究を開始していった。

## 3. 研究の方法

2で述べた目的に対して、具体的には、インタビュー調査などで現場の実践を明らかにするミクロな手法に基づく研究と、現代社会の論理の変化や財政などの動きを追うマクロレベルのデータを用いた研究という二つを通じて明らかにしていくことを試みた。

具体的には、下記の(1)(2)のようなプロセスで作業を行った。

(1)医療・保健・福祉領域全般において、近年とみに強調されている「予防」という発想が、政策化・実践化されていく際の論理とその内実(そして予想される結果)を、医療社会学や社会理論の枠組みを参照しつつ、具体的な対象領域を記述・分析するという作業である(マクロ社会学的な分析)。

対象は、当初は、各健康保険者に義務付けられる特定健康診断・健康指導の動きと、認知症介護において強調される地域のMCI

(Mild Cognitive Impairment 軽度認知障害)予防の動き、の二領域を予定していたが、高齢者介護領域全体を含む認知症介護領域の動きについての分析に絞る形で行った。特に後者に絞っていった理由は、本研究開始後に

において、NHK川口アーカイブスが映像データアーカイブスを利用した研究の募集を開始したため、そこに応募し採択されたためである(研究費は給付されず、アーカイブスの利用権のみ認められる採択)。1970年代からの認知症ケアの取り組みについての番組を見ることのできるそのアーカイブ資料を用いることで、政策関連のデータに加える形で認知症ケアにおける予防の考え方の現れについて、分析することが可能となった。2010年から2011年にかけては、アーカイブスに通って番組内容をテキスト化する作業に従事し、2012年以降のアウトプットを行うという方針に転換したため、当初予定していた特定健診に関する分析は省略することとした。

(2)以上のようなマクロなレベルでの変化に加えて、現場におけるケア実践が、どのような問題性と可能性を有しているのかを、「予防」が語られ導入される社会的コンテクストとの関連で明らかにすることを試みた。

当初は、いのちや健康という価値と強く結びつけて予防が語られた長野県の佐久総合病院の活動と、予防や症状の遅延、およびその先にある新しい薬の開発が生きる上での「希望」として語られる若年認知症の人と家族、および彼/彼女らを支援する専門職の実践との2領域を、フィールドワークやインタビューなどの質的方法を用いて考察することを予定していた(個別事例を通じた分析)。

しかし、研究代表者の奈良県への移動、および先述したデータアーカイブスの利用により、認知症領域を深く分析する方に焦点をシフトしたため、前者の作業は断念し、後者の若年認知症ケアのフィールドワークに絞って行った。

## 4. 研究成果

上記で言うと(1)に当たるミクロなケア実践のフィールドワークに基づく研究が本研究課題の中心的な成果となる。主に若年認知症の人へのケアに取り組んでいるデイサービスへのフィールドワークに基づいて、認知症ケアにおける予防志向の強まりや、医療の役割の強調と「本人中心のケア」と言われるような認知症ケアの理念との関係について考察を行ってきた。

予防志向が、ケア現場における実践に与える影響としては、まず以下のようなことが見出された。現場において、予防を重視することは、家族や認知症の本人にとって、なるべくなら避けたい認知症という状態に抵抗する手段を獲得できるという当事者にとって重要な意味を持っているが、同時に、認知症の進行という避け得ない現実からすると、逆に衰えを受け容れることが難しくなるという困難を生み出す面もある。現場のケアの専

門職は、以上のような予防志向の持つ功罪についてある程度までは認識しており、そこで生まれる困難を緩和するために様々な工夫を行っている。

また、家族や当事者の視点からは、認知症になった後の新しいアイデンティティの獲得に際して、予防志向を中核とした医療の論理が機能しているという面も見ることができたが、認知症が進行していく中で、「よくなる」「維持する」という方向性の医療の論理とどう折り合いをつけていくのか、という点に関する分析は、今後、より一層深めて考察していくべき課題として残された。

以上のようなミクロな現場でのフィールドワークに基づくモノグラフが、中心的な成果であるが、それと同時に並行的に行った、上述の(2)に当たる内容に関して、認知症領域を含んだ現在の高齢者政策や認知症ケア実践における予防志向がどういった思想や制度に結実しているかを考察した論文も執筆した。著書③では、予防への志向が認知症の人や高齢者の社会への包摂に繋がっている一方で、その追求は衰えていくということを確認する社会を作っていく上で困難を生み出すということを明らかにした。また、論文④では、認知症ケア領域の予防志向を含めて、高齢者介護領域全体の政策的な動きについて流れを分析した。

また研究開始後に始めたNHKアーカイブスを利用した部分については、研究年度中は、「その他②」のような調査の意義にかかわる部分を解説した記事や、番組制作に深く関わったディレクターへのインタビューの記事「その他①」といった途中段階での報告に留め、2012年以降に論文として発表していく予定である。

以上のような研究を中核に、ケア研究全体における本研究課題の意義や位置づけを明らかにするといったことにも取り組んできた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

①井口高志、認知症の人を介護する家族と支援から学ぶこと、インターナショナル ナーシング レビュー、35 (3)、2012、査読無

②井口高志、医療の論理が認知症ケアにもたらすもの、福祉社会学研究、9、2012、査読有

③井口高志、支援・ケアの社会学と家族研究—ケアの「社会化」をめぐる研究を中心に、家族社会学研究、22 (2)、165-176、2010、査

読無

④井口高志、高齢者関連政策の動向—介護政策を中心に、保健医療社会学論集、21 (1)、17-24、2010、査読無

⑤井口高志、認知症とされる人と生きる家族介護者、家族看護、7 (1) 16-21、2009、査読無

[学会発表] (計5件)

①井口高志、認知症の本人はいかに描かれてきたか、愛宕山シンポジウム、2011年5月19日、NHK ライツ・アーカイブスセンター・NHK 放送文化研究所、東京

②井口高志、研究倫理と向かい合うことから社会学研究を問い直す—認知症ケアに関する調査経験から、保健医療社会学会第203回関西定例研究会、2009年10月3日、神戸学生青年センター、神戸

③井口高志、支援・ケアの社会学と家族研究、第19回日本家族社会学会大会 (学会化20周年記念テーマセッション)、2009年9月12日、奈良女子大学、奈良

④井口高志、「同意を得る」とはどういうことか?—認知症とされる人・介護家族・専門職への聞き取り調査を事例に、第7回福祉社会学会大会 (テーマセッション「福祉社会学の倫理」)、2009年6月6日、日本福祉大学、名古屋

⑤井口高志、認知症ケアにおける<医療>の論理—若年および軽・中度の認知症とされる人を対象としたデイサービスの事例から、第81回日本社会学会大会、2008年11月24日、東北大学、仙台

[図書] (計6件)

①井口高志、アイデンティティを保ち作るケア—若年認知症の人の新しい社会関係と自己への移行をめぐる実践、三井さよ・鈴木智之編『ケアのリアリティ』法政大学出版局、77-105、2012

②井口高志、新しい認知症ケア時代のケア労働—全体的にかつ限定的に、仁平典宏・山下順子編『労働再審 第5巻 ケア・協働・アンペイドワーク—揺らぐ「労働」の輪郭』大月書店、127-159、2011

③井口高志、認知症をめぐる排除と包摂、藤村正之編『差別と排除の「いま」』④福祉・医療における排除の多層性、明石書店、87-122、2010

④井口高志、介護問題の社会学、日本社会学会社会学事典刊行委員会編『社会学事典』丸善、308-309、2010

⑤井口高志、第8章 臨床の場とケア（三井さよと共著）、三本松政之、杉岡直人、武川正吾編『社会理論と社会システム』ミネルヴァ書房、124-136、2009

⑥井口高志、医療の論理にどう対するか、崎山治男・伊藤智樹・佐藤恵・三井さよ編『＜支援＞の社会学——現場に向き合う思考』青弓社、185-208、2008

〔その他〕

①井口高志（インタビュアー）、認知症を描くことをめぐって——川村雄次（NHK ディレクター）インタビュー、支援編集委員会編『支援 vol.2』生活書院、86-124、2012

②井口高志、現場への遠近法、支援編集委員会編『支援 vol.1』、生活書院、88-89、2011

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

井口 高志 (IGUCHI TAKASHI)

奈良女子大学・生活環境学部・准教授

研究者番号：40432025